

# 「ドイツ家庭文庫」における本の装丁の重要性について

竹 岡 健 一

## 1. はじめに

拙論「ドイツにおける『ブッククラブ』の歴史と研究の観点」で述べたように、ドイツにおいて19世紀末から1920年代にかけて設立された21のブッククラブの中には、本の装丁にもこだわりを持ち、書物の外見上の商品価値をも重視していたブッククラブが、少なくとも5つあった。すなわち、「ドイツ家庭文庫」、「愛書家国民連合」、「ゲーテンベルク図書協会」、「ドイツ・ブッククラブ」、および「大胆な投擲」である。<sup>1</sup>また、その後の調査で、「ブックサークル」も同様の傾向を持っていたことが確認されている。<sup>2</sup>だが、ドイツにおいて、とりわけ第一次世界大戦後にブッククラブが急速に発展した主要因の一つが、職員層や労働者層といったもともと経済的に豊かでない人々や、戦争とインフレで貧しくなった市民層に対して本を安く提供することにあつたことを考慮したとき<sup>3</sup>、本の製造費用を高める装丁へのこだわりは、本来の目的と矛盾するものと見なさざるを得ない。それにもかかわらず、これらのブッククラブにおいて本の装丁が重視された理由は何だったのであろうか。本稿では、この謎を解き明かす一助として、「ドイツ家庭文庫」の事例を取り上げ、詳しく考察したい。

## 2. 「ドイツ家庭文庫」における本の装丁の全般的特色と装飾的価値

「ドイツ家庭文庫」(Die deutsche Hausbücherei)は、ハンブルクに本部を置く保守的商業職員の労働組合「ドイツ民族商業補助者連合」(Der deutschnationale Handlungsgehilfen-Verband)の出版部門によって、第一次世界大戦中の1916年に設立されたブッククラブである。当初は「ドイツ民族家庭文庫」(Die deutschnationale Hausbücherei)と称していたが、同じ„deutschnational“という語が用いられていた当時の政党と無関係であることを明確にするため、1923年より「ドイツ家庭文庫」へと改称された。筆者はこれまで、同文庫の活動について、歴史、世界観、主な作家・作品、雑誌などを中心に分析してきたが<sup>4</sup>、その結果、同文庫が同時代のブッククラブの中で持つ特殊性として、次のような点が明らかになっている。<sup>5</sup>

- (1) ドイツ家庭文庫は、同時代の21のブッククラブのうち、特定の世界観的背景を持つ8つのものに属する。ただし、そのうち5つがおおむね社会主義的な傾向を、2つがキリスト教的な傾向を持つのに対し、ドイツ家庭文庫は、明確な「愛国主義的・民族主義的」傾向を持つ点で際立っていた。
- (2) こうした世界観的背景は、ブッククラブの読者層とも連動しており、社会主義的傾向のブッ

ククラブが主に労働者層を、キリスト教的傾向のブッククラブがその信者を主な購読者としていたのに対し、ドイツ家庭文庫は、その母体であるドイツ民族商業補助者連合の商業職員を始めとする「職員層」＝「新中間層」を主な購読者としていた。

- (3) ドイツ家庭文庫は、もっぱらドイツ人の民族性に立脚した本の刊行と読書指導を行なうことによって、ワイマール共和国時代から第三帝国時代にかけての「新中間層」の右傾化に影響を及ぼした。

このように、同時代のブッククラブの中でドイツ家庭文庫が持つ最大の特性は強い保守的世界観を持っていたことと、「新中間層」を主な購読者としていたことにあり、特に後者の点を考慮したとき、同文庫においては、本を安く提供することが大きな課題となっていたはずである。ところが、それにもかかわらず、同文庫においては、本の外見、つまり装丁にも重きが置かれていた。そのことは、例えば、同文庫の雑誌『かまどの火』の1936年2号に掲載された記事「私たちの装丁について」の次のような件から見てとることができる。

ドイツ家庭文庫は、以前から、芸術的で趣味のよい装丁に価値を置いています。ドイツ家庭文庫の指導部によって本の作成に課される要求は、精神と素材、内容と装丁、文学の調子と装丁の印象の完全に調和した一致が達成されたとき、初めて満たされたものとみなされます。特殊技能としての本の装丁に専念する専門的な芸術家のスタッフが、製造部門と緊密に協力して仕事をしない、無数のスケッチと新しい試みの後に、理念、刺激、造形、および却下から、本にふさわしい唯一の装丁が成立するのです。<sup>6</sup>

もっとも、ドイツ家庭文庫では、インフレが終息した1924年以後は、年間24マルクの会費で6～8冊程度の本が提供されており、価格的に見れば、決して他のブッククラブよりも高いわけではない。<sup>7</sup>しかし、それならば、装丁へのこだわりを持たなければ、本をよりいっそう安く提供できたはずである。にもかかわらず、当時経済的に豊かでなかった「新中間層」を主な購読者とするドイツ家庭文庫において、本の安い販売のみならず、費用がかかる本の装丁が重視されたのは、いったいなぜなのか。その理由を検討するにあたり、まず、ドイツ家庭文庫の本の装丁は具体的にどのようなものだったのかを見ることにしたい。そのため、ここで、同文庫の雑誌の多数の記事から、同文庫の本の装丁を特徴づける言葉を取り上げる。<sup>8</sup>表1は、ピックアップされた言葉を分類したものであるが、ここから、同文庫の本の装丁が、全体として次のような5つの特色を持っていたことがわかる。

#### (1) 完成度の高さ

非常によく製造された、卓越した模範的なもので、信頼のおける高い価値を持ち、内容と装丁に統一が図られている。

表1 ドイツ家庭文庫の本の装丁の特色(a) 装丁全般

(1) 完成度の高さ
<p>よい 本当によい 上質の 卓越した 模範的な      とてもよく作られた ドイツの第一級の仕事 ドイツ人らしい仕事      本にふさわしい唯一の装丁 服の中身に合わされた 内容、挿絵、装飾文      字、装丁、見返しの紙が一つの統一のよう      価値のある 価値の高い 不変の価値を保証する      信頼のおける 信頼性が十分に保証された      統一的な      独特の      繰り返し気に入る      親しみのある      豪華な</p>
(2) 美しさ
<p>美しい きれいな 目の喜び とても見栄えがする      魅力的な 魅力的な衣装 とても魅力的なもの      趣味のよい 贅沢な趣味に合う センスのよい エレガントな      芸術的な 芸術的なデザイン 芸術的に是認しうる      色鮮やかな 色彩と生命を住居にもたらず 瑞々しさと生彩をもつ      書籍愛好家的な性格と魅力 すべての愛書家をうっとりさせる      すべての本棚の装飾品 すべての部屋の装飾</p>
(3) 飾り気のなさ
<p>飾り気がない 飾り気のない美しさ 控え目 めかしたてられていない      誠実な 作為的でない ありのまま 内容を偽らない</p>
(4) 本物のよさ
<p>本物の 本物だから美しい 本物の素材 インダンスレン（高級染料）      まがいものでない 人工の革や革のイミテーションを用いることは避ける</p>
(5) 丈夫さ
<p>丈夫な 頑丈な ショックに耐える 長持ちする 何世代も長持ちする</p>

## (2) 美しさ

とても美しく、魅力的で、趣味がよく、芸術的で、色鮮やかであり、本棚や部屋の装飾品としても役立ち、書籍愛好家の注目を惹くに足る。

## (3) 飾り気のなさ

美しさは決して虚飾ではなく、本が本来持っている価値以上にめかしたてられていない。

## (4) 本物のよさ

本物の素材を用いて製造されている。逆に言えば、人工の素材やイミテーションは用いられておらず、まがいものでない。

## (5) 丈夫さ

丈夫で、ショックに耐え、いつまでも長持ちする。

また、表 2 は、同文庫の装丁の個別の点を特徴づける言葉をまとめたものであり、ここから、次の 4 つの特色が見て取られる。

表 2 ドイツ家庭文庫の本の装丁の特色(b) 個別の点

(1) 紙
よい 最良の 上質の (木質繊維を含まない) 高い要求を満たす 白い
(2) 印刷
注意深い 念入りな 高い要求を満たす 非の打ちどころのない はっきりした読みやすい文字
(3) 綴じ
丈夫な 糸綴じ
(4) 製本
よい 美しい きわめて念入りな 丈夫な加工

## (1) 紙

高い要求を満たす上質の (木質繊維を含まない) 紙が用いられている。

## (2) 印刷

高い要求を満たす念入りな印刷がなされており、文字も読みやすい。

## (3) 綴じ

丈夫な糸綴じである。

## (4) 製本

きわめて念入りで、美しく丈夫な加工が施されている。

これら個別の特色も含めて考えたとき、ドイツ家庭文庫の本の装丁を、次のように特徴づけることができよう。すなわち、それは上質な本物の素材を用いた入念な作業によって作られ、本の内容

とも統一が図られており、非常に美しく芸術的だが、かといって必要以上に飾り立てられてはおらず、丈夫で長持ちする実用性をも備えているのである。

ドイツ家庭文庫によれば、同文庫では、1924年以来継続的に装丁の改善に対する取り組みがなされ、それによって達成された以上のような装丁は、愛書家からのみならず、『クリムシュ印刷業新聞』(Klimschs Druckerei-Anzeiger) のような業界誌においても高く評価され、同文庫とその本の名声や評判を高めることに寄与した。<sup>9</sup> さらに、所有欲を喚起する、感銘を与える装丁は、同文庫の伝媒体としての効果を自ずと発揮し、また家庭においては、子供に本の注意深い取り扱いを教えることにも役立った。<sup>10</sup>

一方、ドイツ家庭文庫に関する先行文献においては、同文庫の装丁が持つ意味として、本の所有者の身分とのかかわりが指摘されている。この点について、トーマス・ガルケ＝ロートバルトは、ナチス時代に活躍した出版人ゲオルク・フォン・ホルツブリンクに関する研究書において、次のように述べている。

ただし、ゲオルク・フォン・ホルツブリンクを駆り立てたのは、あくまでも質に対する感覚、つまり、当該の商品とともに、玄関口での売れ行きを楽にする信頼に足るメッセージの利点に対する感覚であった。と同時に、彼にとっては、本の内容よりも、本に満たされた作りつけの戸棚が与えることができる象徴的な雰囲気、すなわち教養市民的なアウラのほうが重要だった。それは、ドイツ民族商業補助者連合(DHV)が、1916年に最初のブッククラブであるドイツ民族家庭文庫を設立したさいのイデオロギーだった。この職員労働組合にとって、本はプロレタリア化の不安を追い払うための呪物として、職員たちが「新中間層」として教養市民の遺産を相続することの目印として役立ったのである。(傍点引用者)<sup>11</sup>

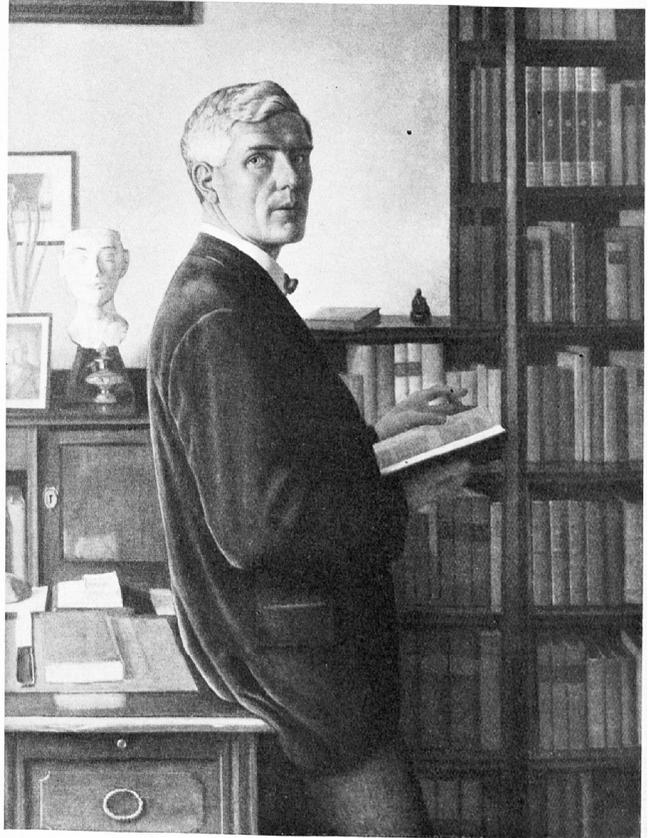
このような見方は、ドイツ家庭文庫の母体をなすドイツ民族商業補助者連合が、その組合活動においても幅広い文化的活動においても、商業職員の身分の上昇、とりわけ「新中間層」としての位置づけと「労働者階級」との明確な棲み分けを主たる目的としていたことを考慮したとき、妥当なものと言える。<sup>12</sup> 1928年11月に『家庭文庫の使者』に掲載された記事「家族の中心としてのドイツ家庭文庫」には、ドイツ家庭文庫の新しい本が届くたびに、その「とても美しい本」が手に入るよう世話をしたのが自分であるにもかかわらず、家族が先を争って読むために、当分はその本を見ることも読むこともできないことを残念に思いながらも、「彼のドイツ家庭文庫の本が家族の中でそれほど熱心に求められることを実に誇らしく思う」<sup>13</sup> 父親の姿が描かれているが、そこでも、装飾品としての本とそれが収められた本棚が放つ魅力について、次のように述べられている。

彼にとっても、ドイツ家庭文庫の本は欠くことのできないものとなっていました。それらは、彼の本棚の「ゆるぎない蔵書」と特別な装飾品を形成しており、じっくりと考え込みながら自分の本棚の前に立ち、会員となって以来5年の間に入手した多くの本の長い列に沿ってまなざしを動かすとき、彼はいつも、それほど簡単なやり方で、本当によい本を手に入れたことを喜びまし

た。彼は、夕方本棚の戸を大きく開き、読みたい本を心ゆくまですべて取り出す時間を愛しました。暖炉の中の風が静かな無言の伴奏を奏でる秘密の魔力を持つこの夕べは、家庭文庫の新しい本が到着したとき、特別な刺激を持ちました。(傍点引用者)<sup>14</sup>

また、**図版1**は、「ある愛書家の肖像」というタイトルが付された、『かまどの火』の1932年6号の表紙であるが<sup>15</sup>、書斎の本棚の前で、背広姿で本を手にする男性の姿は、まさに教養市民としての「新中間層」の理想的なイメージを表したものと言えよう。

しかしながら、こうした本の装飾的価値は、確かにドイツ家庭文庫の本の装丁が持つ大きな意味の一つではあるものの、同文庫の本だけが持つ固有の特徴というわけではなく、一般に、「知的大衆商品」としての本が多かれ少なかれ持ち合わせている特徴である。そのことは、とりわけ百科事典や文学全集のような大型の本に当てはまるが、こうした大きく、重く、値段の高い本が、小型化、軽量化、低価格化へと向かう本の「進化」の原理に反して一斉を風靡した理由を、明星聖子は次のように説明している。



図版 1

冒頭で引用した津野のあの予言は、まさにこの点を突いている。もう一度彼の言葉をみていただきたい。そこで「すがたを消す」といわれているのは次のものだ。——「百科事典同様、知的大衆商品としての函入りの全集本」。すなわち、百科事典も全集も彼にいわせれば、「知的大衆商品」なのである。津野がいう「知的大衆商品」とは、前後の脈絡から判断していえば、「持っている」だけで「知的」に見える商品ということである。たしかに、仰々しい百科事典は、応接間という「持っている」ことを見てもらえる場所に置かれていた。また美しい装丁の函入り全集も、どちらかといえば、人目につきやすいところに「飾られて」いた。それらは、読むためというよりも、「見せる」ための本だったというわけである。「見せる」というのが目的であるとすれば、外見は非常に重要である。中身の「かたさ」を表現すべく、かたくてごつごつしているほうがいいし、中

身の「大きさ」「重さ」に比例して、実際に重量があつて大きいほうがいい。また中身の「高級さ」も表すべく、価格は高くないと困る。つまり、三重苦は、ここではブランドイメージを高めるために大いに貢献していた。(傍点引用者)<sup>16</sup>

ドイツ家庭文庫において重視された「本に満たされた作りつけの戸棚が与えることができる象徴的な雰囲気、すなわち教養市民的なアウラ」とは、まさしくここに述べられたような「知的大衆商品」としての本が持つ価値であつたといえよう。そしてまた、ウルバン・ファン・メリスによれば、「グーテンベルク図書協会」が本の装丁に特別な注意を払った背景にも、「立派な本を所有することを通して社会的な声望を得たいという広く行き渡つた願望に答える」<sup>17</sup> という、同じような意図があつた。

さて、このように、本の装飾的価値そのものは必ずしもドイツ家庭文庫だけに見られる特性ではないとすれば、同文庫の本の装丁の独自性はいったいどこにあるのだろうか。それを明らかにするには、より踏み込んだ分析が必要となる。

### 3. 「総クロス装」と「愛国的・民族的」世界観の結びつき

そこで、ドイツ家庭文庫の本の装丁をより詳しく見たとき、注目に値するのは、「総クロス装」に重きが置かれたことである。例えば、『かまどの火』の1931年12号の記事「エルバーフェルトからの手紙」において、同地に住むドイツ家庭文庫の長年の会員シュミッツは、「年間シリーズ」の購読について、次のように述べている。

同じ価格で、2種類の製本を自由に選べます。丈夫な総クロス装（これが通例です）、または——希望により——趣味のよい背革装です。(傍点引用者)<sup>18</sup>

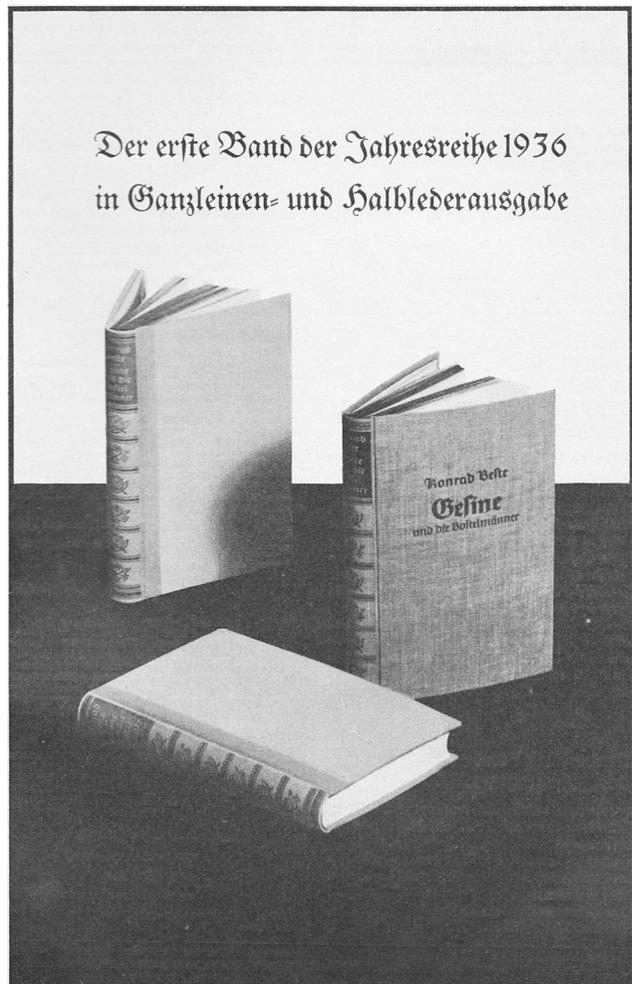
また、同誌1935年4号の記事「愛書家は家庭文庫の会員」においても、次のように述べられている。

なぜなら、——年間シリーズにおいて、価格が高くなることなしに、好きなように、総クロス装の本と背革装の本を選べるからです。総クロス装の本の購入の可能性は、まさにドイツ家庭文庫の大きな利点と感じられます。(傍点引用者)<sup>19</sup>

このように、ドイツ家庭文庫においては、「年間シリーズ」の本が「総クロス装」と「背革装」という2種類の装丁で刊行され、購読者にはそれらを自由に選ぶ可能性が与えられてはいたが、しかし、両者の比重は同じではなく、「総クロス装」の選択が強く勧められ、それによって、すべての会員の90%は、「年間シリーズ」の購読にあたって「総クロス装」を選んでいた。<sup>20</sup> また、こうした「総クロス装」の重視は、「年間シリーズ」の本に代えて購読できる「選択シリーズ」や「夏とクリスマスの贈り物」として提供された本が「総クロス装」でのみ提供されたことにも表れてい

る。<sup>21</sup> なお、**図版2**は、『かまどの火』の1936年1号に掲載されたものだが、同年の「年間シリーズ」第1巻であるコンラート・ベステの『ゲズイーネとポステルマン家の人々』が、二つの装丁で示されている。<sup>22</sup> 左奥と前方に横に置かれているのが「背革装」、右側が「総クロス装」である。

それでは、ドイツ家庭文庫ではなぜ「総クロス装」に重きが置かれたのだろうか。それを明らかにするために、ドイツ家庭文庫の雑誌の記事に基づいて、「総クロス装」と「背革装」の特徴を比較すると、**表3**に簡潔に示したように、前者の長所として、「美しさ」と「丈夫さ」という2つの点が浮かび上がる。



図版2

表3 総クロス装と背革装の相違

	総クロス装	背革装
美しさ	飾り気のない美しさ より控え目で、それゆえによりエレガントな効果を及ぼす	見た目により魅力がある 見た目に美しい
丈夫さ	丈夫な 長持ちする ショックに耐える 激しいショックに耐える	より傷つきやすい 当然傷つきやすい より注意深い扱いを必要とする

まず「美しさ」についてであるが、ドイツ家庭文庫の本が総じて高度な美的価値を持っていたことはすでに見た通りであり、この点は「総クロス装」も「背革装」も同様である。しかし、両者

の美しさの質は同じではない。上述のように、「選択シリーズ」の本と「夏とクリスマスの贈り物」の本はもっぱら「総クロス装」で提供されたが、その意味について、『かまどの火』の1932年4号の記事「選択シリーズの本と夏の贈り物の装丁の種類」では、次のように述べられている。

選択シリーズの本と夏の贈り物の本は、信頼のおける、本物の素材の、長持ちする総クロス装でのみ提供されます。私たちは、選択シリーズの外面的な装丁のために、どんな苦労や費用をかけることも厭いません。というのも、私たちにとって重要なことは、価値の高い総クロス装の本を通じて、背革装シリーズの購入者に対し、背革装の本はなるほど見た目に幾らかより魅力的だが、しかし総クロス装は、単に長持ちするだけでなく、その飾り気のない美しさによって、より控え目であり、それゆえによりエレガントな効果を及ぼすのだということの証拠を示すことだからです。<sup>23</sup>

つまり、「背革装」の美しさが表面的なものなのに対し、「総クロス装」のそれはより高尚な、本質的なものなのである。そして、両者のこのような相違は、ドイツ家庭文庫が当時の他のブッククラブに対して自らの長所を主張するさいの目印ともなっていた。『ハンザ同盟の書物の使者』の1924年6/7号の記事「書籍協会とドイツ家庭文庫」では、この点について次のように述べられている。

私たちドイツ家庭文庫が1917年以来提供しているような、継続的購入と年間文庫という本の宣伝の形式は、最近、多数の書籍協会とブッククラブに借用されました。その中には、費用のかさむ恐るべき宣伝とともに登場し、それによって明らかな成功を収めたものもあります。なんといいても、そこで提供されている仕事が、一見したところ、他のブッククラブを、また特に私たちの文庫をはるかに凌いでいるように見えるのだから、なおさらです。このことは、とりわけ本の選択と装丁に当てはまります。見た目に美しい背革装の本が、知識のない人々に、しばしば本の価値を見誤らせるのです。その種のブッククラブが途方もなく大きな版数を自慢しているので、人々はしばしば十分に、本の印刷と装丁から、工場のような大企業を見てとります。そしてその結果、外面的な装丁を通じてすぐに本の購入者となった物見高い人々の多くは、総クロス装で丈夫に綴じられ、最良の紙に注意深く印刷された本を持つ私たちの文庫に戻って来たのです。(傍点引用者)<sup>24</sup>

このように、「背革装」の美しさは、本に対する人々の価値観を損なう危険性を孕んだものと見なされている。これに対し、「総クロス装」がドイツ人の健全な価値観の形成という役割を担っていたことは、『かまどの火』の1934年3号、4号、5号に掲載されたアピール「ドイツ家庭文庫」の次のような件から見てとれる。

落ち着きなく活動する利子に飢えた産業が、民族の健全な価値観を損なったとき、まがいもの、がらくた、およびキッチュが、文化を殺し、魂を殺す効果を及ぼし始めたとき、ドイツ家庭文庫

は価値観という考え方を布教し、総クロス装という形で、新しいドイツの本の型を作りました。<sup>25</sup>

すなわち、ドイツ家庭文庫の本の装丁は、母体であるドイツ民族商業補助者連合の教育活動が全体として持っていた方向性、つまり、外国の文化、とりわけアメリカ由来の大衆的な文化の過度の影響からドイツ人の民族性を護り、民族の精神生活の発展に資するという信念ないしは使命感の具体的な表れの一つなのである。<sup>26</sup>

次に、「総クロス装」の「丈夫さ」に目を向けると、傷つきやすい「背革装」に比して、丈夫で長持ちする「総クロス装」の長所を強調した言葉として、『かまどの火』の1933年1号の記事「私たちの家庭文庫について」における、次のような件があげられる。

#### 本の装丁

私たちの今年の夏とクリスマスの贈り物は、選択シリーズのすべての本と同様、色彩豊かな総クロス装の服を着るでしょう。背革装の版の友人たち全員に、これらの本の装丁と、請求されるなどした選択シリーズの本の装丁とを、少し詳しく眺めて、比べてみるようお願いいたします。私たちは、私たちのより美しく、より長持ちする総クロス装が背革装よりもずっと好まれることを、繰り返し経験しています。その理由は、事柄の本質にあります。というのも、クロス装は「まさにショックに耐える」からです。背革装は見栄えはよいのですが、しかしより傷つきやすく、それゆえより注意深い扱いを必要とします。<sup>27</sup>

また、同誌1935年3号の記事「ドイツ家庭文庫」でも、「総クロス装」の長所について、次のように述べられている。

#### 総クロス装

本が単に目を楽ませるべきであるのみならず、本当に繰り返し読まれるところで、当然傷みやすい背革装の巻に対する利点が特に与えられる、本物の素材の長持ちする総クロス装の本を、ドイツ家庭文庫は、特別な愛情を込めて世話します。しかも、ドイツ家庭文庫の場合、いつもそうです。<sup>28</sup>

この他にも、同誌1940年1号の記事「家庭文庫のある新会員への手紙！」において、リヒャルトと名乗る会員が、新たにドイツ家庭文庫の会員となった知り合いのカールに対して、「クロス装を選びたまえ！ 君も知っているとおりに、ぼくはぼくの本を、腫れものにもでもさわるように扱ってはいない。——家庭文庫のクロス装の本は、本当に激しいショックに耐えられるのだ」<sup>29</sup>と述べている。

このように、「総クロス装」は、傷みにくく、繰り返しの読書に耐えるという点で、「背革装」よりも優れた実用的長所を備えている。だが、「総クロス装」の「丈夫さ」の意味は、そうした実用的な側面にのみあるのではなく、ドイツ家庭文庫の愛国的・民族主義的な世界観とも深いかわりを持っており、この点については、先にもあげた「書籍協会とドイツ家庭文庫」において、次

のように説明されている。

装丁は上品で長持ち——上質の紙、念入りな印刷、総クロス装——するでしょう。それは、一時的な所有者に奉仕するのみならず、それを所有する人の相続財産として、子や孫にも喜びと精神修養をもたらすべき本にふさわしいものです。瞬間的な娯楽しか考慮されていない本は、価値ある装丁には値しません。しかし、家庭の蔵書に属する本は、繰り返し何度も手に取られ、ドイツ精神の証明として、私たちに語りかけるべきなのです。<sup>30</sup>

つまり、「ドイツ精神の証」としてドイツの家庭に備えられ、世代を越えて受け継がれ、喜びと精神修養をもたらし続けるような本に相応しい装丁とは、丈夫で長持ちする「総クロス装」であり、傷つきやすい「背革装」はその任には堪えないのである。

このように見たとき、ドイツ家庭文庫における「総クロス装」の重視は、その美しさの点でも、丈夫さの点でも、ドイツ民族の間に健全な価値観を育むことができるような、「ドイツ精神の証」としての本の普及を図るといふ同文庫の目的と密接なかかわりを持っている。「総クロス装」そのものは決して珍しいものではないだろうが、その利用が「愛国的・民族的」な世界観と緊密に結びつけられたところに、他のブッククラブにはないドイツ家庭文庫の独自性が見られるのである。

#### 4. 装丁の具体例

以上見てきたように、ドイツ家庭文庫においては本の装丁に重きが置かれ、とりわけ「総クロス装」が重視されていたが、そのことを踏まえた上で、ここで、「背革装」も含めて、同文庫の本の装丁の実例を幾つか確認しておきたい。そこで、同文庫の雑誌『かまどの火』の記事から、本の装丁について特別な説明がなされている事例を取り上げ、その説明とともに、実際の本の写真を示す。なお、雑誌の説明に本の写真が添えられていることもあるが、印刷状態が必ずしもよくないことを考慮し、ここでは、2012年1月29日時点で、古書販売サイトbooklooker (<http://www.booklooker.de/>)に掲載されていた本の画像を借用する。

最初にあげるのは、1933年3号の記事「シリーズ第4巻はとりわけ美しくなります！」で紹介された2冊の「総クロス装」の本である。

ハンス・フランクの『おい 船頭』の表紙がとても大きな賛同を得ましたので、私たちは、芸術家エーリカ・ハンゼンに、私たちのために『寓詩物語』のための表紙も作ってくれるよう委託することに決めました。この芸術家はとても魅力的なものを作ることになりました。縮小した単色の複写は、淡いパステル絵の具の新鮮さと息吹をおぼろげにしか示すことができません。この本はすべての人を喜ばせるでしょう。本の記事も芸術的な挿絵で飾られていますので、なおさらです。<sup>31</sup>

ここにあげられた2冊のうち、ハンス・フランクの本は1932年の「年間シリーズ」第6巻（**図版3**）であり、ゴットフリート・ケラーの詩集『寓詩物語』は1933年の「年間シリーズ」第4巻（**図版4**）である。



図版3



図版4

ところで、「総クロス装」に使われる「クロス」にも、「柔らかい」タイプと「粗い」タイプの2種類があり、購読者の好みにも違いがあったようである。そのことを示すのが、1933年6号に掲載された記事「装丁が問題です！」であり、初めに「柔らかいクロス」と「粗いクロス」それぞれを支持する購読者の手紙がまず紹介された後、それに対する編集部の見解が述べられているが、そこでは、「粗いクロス」のほうがよりドイツ家庭文庫の価値観に適うとみなされている。

## 2 通の手紙

### I.

きわめて公式な質問をしたいと思います。なぜあなた方はとてもしばしば、この灰色のごわごわしたクロスを装丁の素材として用いるのですか。あなた方は、この装丁によって、私が当地でどんな抵抗にあったかまったくご存じありません。146番の本やコンラート・バステ、あるいはハンス・フランク、または『テンプル騎士団員とヨハネ騎士団員』のような柔らかいクロスのほうが、一般により好まれます。レモン色のクロスもとても拒否されます。

ゼメルダのK. D.

### II.

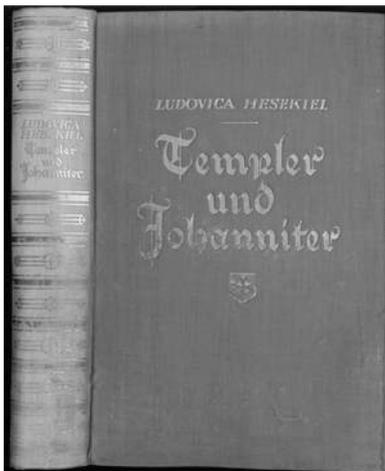
メヒヨウの本の素晴らしい装丁に感謝するために、お手紙を書かずにいられません。この本が再び——私はこう呼ばざるを得ないのですが——「ドイツらしい」粗いクロス装の本となることを願っていたことを、お教えすることができます。忘れがたいヴェーナーの本やりヒャルト・オイリンガーの厚い本『金属工フォンホルト』と同じように。私はこのごわごわした、飾り気の

ない、大変丈夫な装丁の素材を好み、まぎれもなく男性的な本の場合にはまさに、それを他の一切の素材よりも優先します。たしかに、薄手の柔らかいクロスと媚びるような色は、その存在理由を十分持っています。例えば、『寓詩物語』と『おい 船頭』については、もっとよい装丁は思い浮かびませんし、コンラート・ベステの本も相応しい服を着ています。しかし、晴れ着に抵抗し、力強く、のろのろと、まじめに、悠然と大股で歩く本もあります。それに属するのは、あなた方がタイトルの力強い木版画によってまったく特別な調子を与えた『冒険』です。内容と装丁は、渾然一体です。(後略)

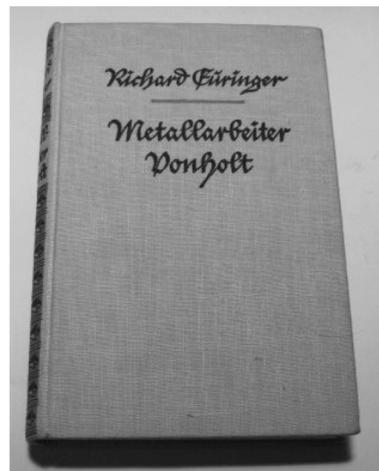
ベルリンのFr. H.

### 私たちの立場

この2通の手紙に関して、私たちの本の装丁の形成は数多くの念入りな熟慮の結果であることを申し添えておきたいと思います。本にはそもそも、その本の性格にふさわしい唯一の装丁しかありません。この唯一可能な装丁を見つけ出すことこそ、製造管理部と書籍芸術家の協力がなすべき事柄です。粗いクロスの装丁は、数年前、3巻本のジグリット・ウントゼト著『クリスティン・ラフランストホター』が刊行されたとき、人気となりました。私たちの民族の中に価値観の形成に対する意識が高まれば高まるほど、粗いクロス装の本の友人たちの輪が大きくなればなるほど、それだけいっそう、素材そのものが、形作る芸術家を刺激します。したがって、例えばコストの問題（それどころか、よい粗いクロスは、たいてい、他のカラーの装丁のクロスよりも高価です）ではなく、とりわけ書籍技術的=芸術的な形成と価値の感覚の問題なのです。(傍点引用者)<sup>32</sup>



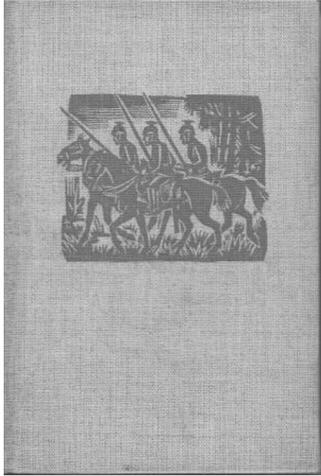
図版5



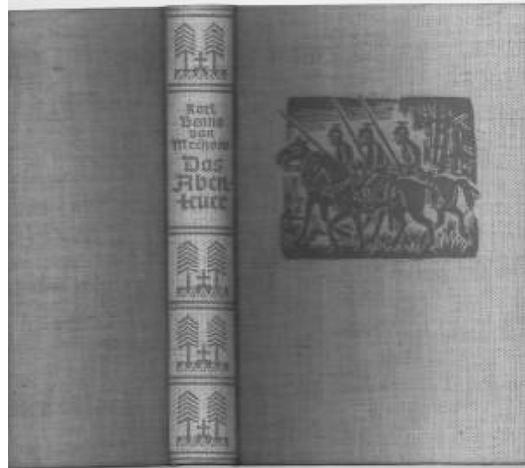
図版6

ここで言及された作品のうち、ルドヴィカ・ヘーゼキールの『テンプル騎士団員とヨハネ騎士団員』は1931年の「年間シリーズ」第4巻(図版5)、リヒャルト・オイリングアの『金属工フォンホルト』は1932年の「年間シリーズ」第5巻(図版6)、カール・ベノ・フォン・メヒョーの『冒険』

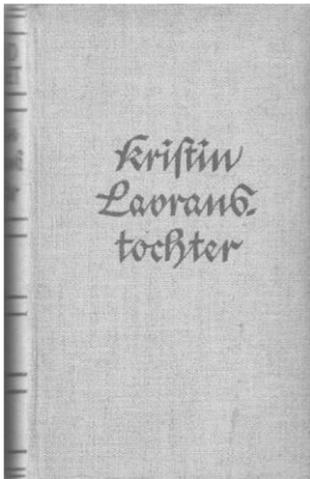
は1933年の「年間シリーズ」第2巻（**図版7・図版8**）である。また、ジグリット・ウントゼットの『クリスティン・ラフランストホター』は、1932年にリュッテン&ケーニヒ出版社から刊行された小説（**図版9・図版10**）を指すと思われる。



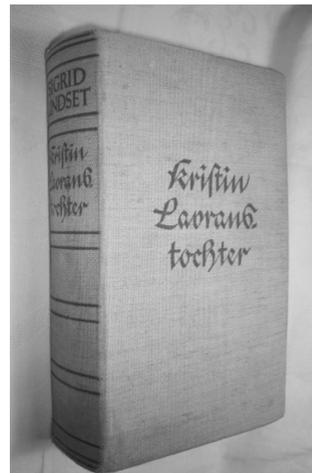
図版7



図版8



図版9



図版10

次に、1935年の「年間シリーズ」第3巻、ヴィルヘルム・フォン・ポーレンツの『桶職人』（**図版11・図版12**）の装丁は、同年3号の記事「私たちの次の巻」によれば、芸術家ハンス・パーベの手になる「美しい総クロス装」であり、背表紙のデザインは「春夏秋冬」<sup>33</sup>を表している。

続いて、1937年の「年間シリーズ」第7巻であるエルンスト・ユンガーの『アフリカの遊び』（**図版13・図版14**）の装丁については、同年6号の記事「私たちの次の巻」において、次のように説明されている。

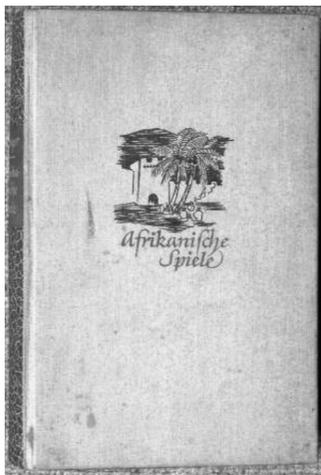
装丁の砂の色のクロスは、キャンプファイヤーの燃え上がる炎の赤い色によって不思議と生命を与えられているように見える絵のための背景をなしています。背表紙はこのアフリカの遊びの世界の馴染みのなさを強調するエキゾチックなうろこ模様を示しています。デザインは、ハンブルクのカール・ブルンスです。<sup>34</sup>



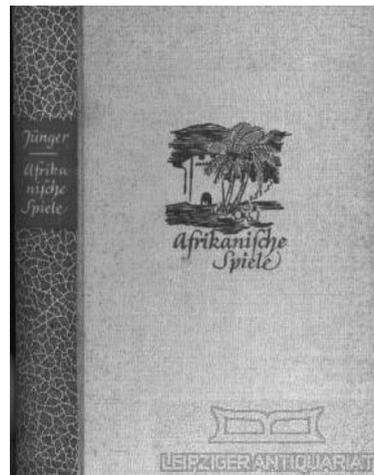
図版 11



図版 12



図版 13



図版 14

同じ記事ではまた、同年の「年間シリーズ」第8巻であるヘルマン・シュタールの『地上の夢』（**図版15・図版16**）の装丁についても、次のように述べられている。

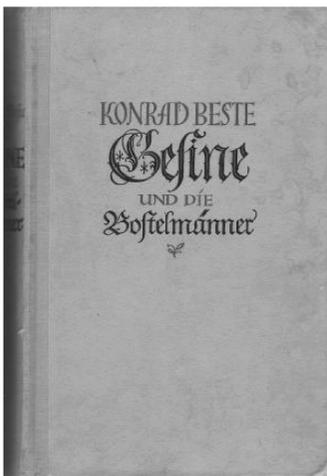
この装丁の作成者であるベルリンのエーリカ・ハンゼンは、ドイツ家庭文庫の友人たちには、もはや見知らぬ人ではありません。この生を肯定する本の親しみのある装丁=絵は、大地のように、またそこでの生活のように、力強く多彩であり、きっと目の喜びです。<sup>35</sup>



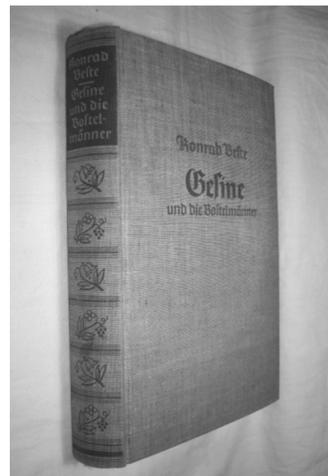
図版 15



図版 16



図版 17



図版 18

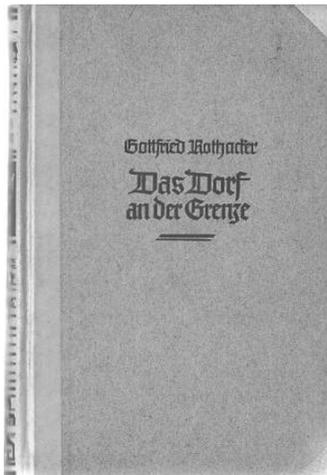
ここまで「総クロス装」の例を見てきたが、次に「背革装」の例を見てみたい。最初にあげるのは、1936年2号の記事「私たちの装丁について」における、同年の「年間シリーズ」第1巻、コンラート・ベステ『ゲズイーネとポステルマン家の人々』の装丁の紹介である。ここでは、「背革装」の版(図版17)について詳しく述べられた後、それに劣らずよいものとして、「総クロス装」の版(図版18)にも短く言及されている。

まったく特別な解決策を示すのは、『ゲズイーネとポステルマン家の人々』の背革装の本です。ドイツの貴重な手漉き紙をカバーとして使用することにより、その装丁は、通常とはまったく異なる革の色調によってさらに強められる、ほとんど書籍愛好家的な性格と魅力を手に入れました。その本には、作弄的なところや、めかしたてられたところは少しもありません。それは、荒野の子供ゲズイーネと同じように、飾り気がなく、本物で、ありのままです。

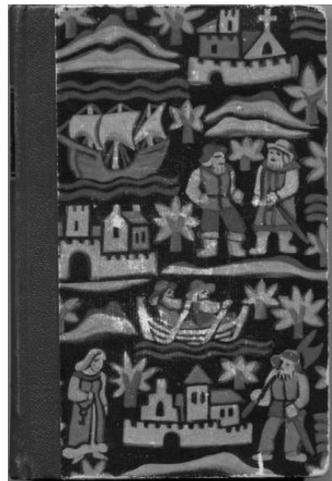
それに劣らず好ましいのは、農夫の手織りの亜麻布を思い出させる瑞々しさと生彩を放つ総クロス装です。<sup>36</sup>

また、同じ記事では、同年の「年間シリーズ」第2巻、ゴットフリート・ロータッカーの『国境の村』(図版19)の装丁についても、次のように述べられているが、本の装丁に対するドイツ家庭文庫のこだわりが改めてはつきりと見てとれる。

背革装に決めた購入者は、第2巻(『国境の村』)のさいに、その装丁の羊皮紙の背表紙(人工の羊皮紙やいわゆる模造羊皮紙をまぜていない、本物の皮の羊皮紙)を嬉しく思うでしょう。この装丁に使われる本物の羊皮紙は、動物の毛皮から作られます。それゆえ、「毛皮の羊皮紙」とも呼ばれます。この羊皮紙の製造の準備は、革の製造のさいと同じで、ただ毛皮が、毛と肉を取



図版 19



図版 20

られた後、木枠にセットされ、皮が完全に仕上がるまでその中に置かれます。芸術的な手仕事の美しい素材として、本物の羊皮紙は、古い時代より最も高貴な装丁の材料とみなされています。それは当然です。私たちの友人たちは、美しい独特の装丁を心から喜び、再び多くの人々から羨まれるでしょう。<sup>37</sup>

続いて、1935年2号から、同年の「年間シリーズ」第1巻、ハンス・フリードリヒ・ブルンクの『大航海』（図版20）の装丁に触れた記事「背革装の『大航海』について」をあげる。

きれいなモンテ型汽船でノルウェーに来たドイツの旅人には、北方民族の並はずれた色彩の好み、特別な魅力として目につきます。彼らは文字通り、青に、赤に、緑に、黄に身を委ねています。あたかも、これらの人々の心が自然の色彩の不足を補うものを探しているかのごとく。私たちは、これらの単純な強い色を、ゲルマン的な北方全域で見出します。私たちはそれらをスウェーデンで見、アイスランドでも見ます。詩人ブルンクと他の誰よりも内面的に親しい芸術家ハンス・パーベは、『大航海』の背革装の本に、カバーの紙のデザインに力強い色と単純で大きな、彫刻のようなタッチを用いることによって以上に、様式上本物の衣を作ることはできませんでした。筋はエキゾチックで輝くように多彩であり、表紙のカバーの紙も輝くように多彩です。小説の人々と出来事は、単純で、偉大で、厳しくあります。作品の表紙から読者に挨拶する帯状の装飾の中の登場人物も、単純で、偉大で、厳しい効果を及ぼします。

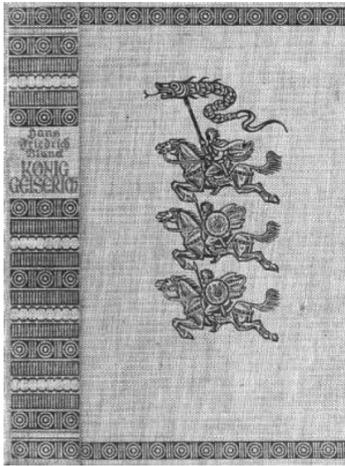
こうして今回は、すべての部屋にとっての、またすべての本棚にとっての装飾を意味し、色彩と生命をすべての住まいにもたらす本が成立しました。私たちはそのさい、独自の道を行くことを意識していました。私たちの友人たちの繊細な理解力は、内容と装丁のこの比類のない共鳴をすぐに感じとります。数多くの投書が、私たちにそれを証明します。<sup>38</sup>

このように、ドイツ家庭文庫の本の装丁を実例とともに見てくると、例えば『桶職人』、『アフリカの遊び』、『国境の村』のように、表紙だけでなく、背表紙にも美しい装飾が施されていることに気づくが、これは、とりわけ本棚に収めたときの見栄えを考慮したためだと思われる。この点で特に興味深いのは1937年1号の「私たちの次の巻」における、同年の「年間シリーズ」第1巻であるハンス・フリードリヒ・ブルンクの『ガイゼリッヒ国王』（図版21）の紹介で、ヘルムス教授のデザインによる背表紙が強調して複写されている（図版22）ことである。<sup>39</sup>

最後に、以上見てきたようなよい装丁に対するドイツ家庭文庫の意志が、第二次世界大戦勃発以後も変わることがなかったことを、1940年2号に掲載された2つの記事から確認しておきたい。

まず、「戦争におけるドイツの本」では、原料が不足する中で、断念すべきところは断念しながらも、芸術的価値のある、趣味のよい装丁を維持しようとする努力が述べられている。

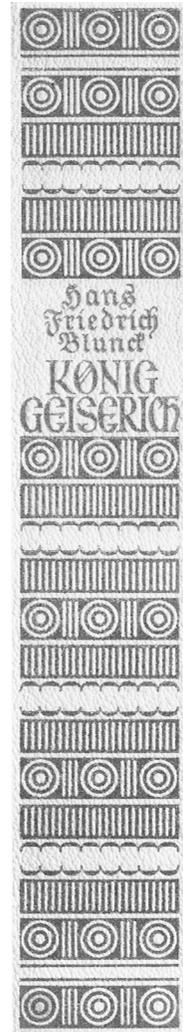
原料の状態によって引かれた限界の枠内で、私たちの生産品の認められた品質に固執するよう努力するのは、まったく当然のことです。しかしまた、私たちが、他の出版社やブッククラブ



図版 21

と同様に、遅かれ早かれ、私たちの民族の勝利の意志から生じる必然性から責任を意識して推論を下すのも当然のことです。

私たちは、これまで通り質のよい紙を供給します。また、私たちが一つの版のための紙の使用に強い制限を課せば課すほど、それだけ長い間、この状況を維持できるでしょう。そこから生じるのは、例えば、本の大きさを見た目に高める、厚くかさばる紙の使用を諦めることや、幾らか小さいが、しかしよく読める文字を選択することです。私たちの本は、あまりに大掛かりな装丁を当然避けることで、相変わらず趣味のよい、芸術的に肯定し得る顔を見せるでしょう。内容は縮小されず、これまで通りとても価値があります。<sup>40</sup>



図版 22

次に、「今からただちにクロス装のみ」では、「背革装」に用いられる革の不足に対して、人工の革などを充てて補うよりは、潔くこの装丁を断念するとされており、「本物」に対するドイツ家庭文庫の強い志向が窺われる。

私たちの購読者の小さな部分は、背革装（紙で覆われた表紙と革の背表紙）に決めました。この装丁の革は、大部分が外国から輸入されていたに違いないのですが、本の装丁の目的には、もはや利用できません。私たちの購入者の利益のために、私たちは人工の革や革のイミテーションを加工することは避けるつもりです。それゆえ、シリーズの巻の背革装版は、すぐさま廃止されます。今ある在庫は、ストックに応じて引き渡されます。<sup>41</sup>

## 5. おわりに

これまでの考察を総合して、ドイツ家庭文庫における本の装丁の意味を考えたとき、「本を安く提供する」というブッククラブの本来のコンセプトに反して装丁が重視された理由を、次の2点に集約することができよう。

- (1) ドイツ家庭文庫の本の装丁は、「総クロス装」と「背革装」を問わず優れた装飾的価値を持ち、それを所有する職員層をプロレタリアートと区別し、「新中間層」として上位に位置づける役割を担っていた。
- (2) 2種類の装丁の中でも特に重視された丈夫で美しい「総クロス装」は、ドイツ人の民族性に立脚した本の普及を図るとともに、国民の間にそれを評価し得る価値観を育成するという目的を有していた。

こうして、ドイツ家庭文庫の本の装丁は、「安い本のための競争ではなく、内容としっかりした装丁が持続的な価値を保証するよい本の製造」<sup>42</sup>を行い、単なる「図書供給施設」<sup>43</sup>を超えて、「真の図書文化」の「保護の場」<sup>44</sup>であろうとする同文庫の愛国主義的・民族主義的な意志を体現していたのである。

### 付記

- (1) 本稿は、科学研究費補助金の支給による研究（平成22～24年度、基盤研究（C）、研究代表者：竹岡健一、課題名：第一次世界大戦後のドイツにおける民族主義的読書共同体<ドイツ家庭文庫>とナチズム、課題番号：22520320）の成果の一部をまとめたものである。
- (2) ドイツ家庭文庫の雑誌については、平成22年9月6日から11日まで、ドイツ連邦共和国ライプツィヒ市の「ドイツ国立図書館」において調査を行った。貴重な蔵書の閲覧と複写を許可して下さった同図書館に対し、この場を借りて謝意を表する。
- (3) 『かまどの火』の収集にあたり、DAAD給費留学生としてキール大学に留学されていた細川裕史氏のご協力を得た。記して感謝申し上げます。

### 注

- 1 拙論：ドイツにおける「ブッククラブ」の歴史と研究の観点（『かいろす』第49号、2011年、33～65ページ）、41～43、46、53～54ページ参照。
- 2 Vgl. Urban van Melis: *Die Buchgemeinschaften in der Weimarer Republik. Mit einer Fallstudie über die sozialdemokratische Arbeiterbuchgemeinschaft Der Bücherkreis*. Stuttgart: Anton Hiersemann 2002, S. 207ff.
- 3 拙論：ドイツにおける「ブッククラブ」の歴史と研究の観点、46ページ、ならびに次の文献を参照。Vgl. Paul Raabe: *Das Buch in den zwanziger Jahren. Aspekte einer Forschungsaufgabe*. In: *Das Buch in den zwanziger Jahren. Vorträge des zweiten Jahrestreffens des Wolfenbütteler Arbeitskreises für Geschichte des Buchwesens, 16. bis 18. Mai 1977*. Hg. von Paul Raabe. Dr. Ernst Hauswedell & Co., Hamburg 1978, S. 9-32, hier S. 26; Michael Kollmannsberger: *Buchgemeinschaften im deutschen Buchmarkt. Funktionen, Leistungen, Wechselwirkungen*. Mit einem Geleitwort von Elisabeth Noelle-Neumann. Harrassowitz, Wiesbaden 1995, S. 26ff.

- 4 拙論：雑誌『かまどの火』について——ナチズムと文学メディアのかかわりに関する考察の新たな手がかりとして（日本独文学会機関誌『ドイツ文学』第116号、2004年、61～68ページ）、拙論：「ドイツ家庭文庫」について——ワイマール共和国時代から第三帝国時代における右翼商業職員への読書指導の一端（研究同人誌『かいろす』第47号、2009年、84～104ページ）、および拙論：ドイツ家庭文庫の雑誌の変遷と収録記事——1923年1号から1941年4号まで——（鹿児島大学言語文化論集『VERBA』第36号、2012年、85～130ページ）参照。
- 5 拙論：ドイツにおける「ブッククラブ」の歴史と研究の観点、41、52～53、59ページ参照。
- 6 Zu unseren Einbänden. In: *Herdfeuer*. 1936 Nr. 2, S. 126.
- 7 拙論：ドイツにおける「ブッククラブ」の歴史と研究の観点、52～53ページ参照。
- 8 具体的な記事については、巻末の「資料1：『ドイツ家庭文庫』の雑誌において本の装丁に言及のある主な記事一覧」を参照。
- 9 Vgl. Die Leistungssteigerung der Deutschen Hausbücherei. In: *Herdfeuer*. 1931 Nr. 2, S. 32; Zu unseren Einbänden, a. a. O.; Ein Buch wird zerlegt. In: *Herdfeuer*. 1931 Nr. 1, S. 14.
- 10 Vgl. Deutsche Frauen werben für das Deutsche Buch. Briefe, die uns erreichten. In: *Herdfeuer*. 1933 Nr. 1, S. 76; Jugend und Buch. In: *Herdfeuer*. 1941 Nr. 4, S. 152f.
- 11 Vgl. Thomas Garke-Rothbart: „...für unseren Betrieb lebensnotwendig ...“ *Georg von Holtzblinck als Verlagsunternehmer im Dritten Reich*. K. G. Saur, München 2008, S. 11.
- 12 拙論：ドイツ民族商業補助者連合（DHV）の歴史と活動——労働組合活動と政治的動向とのかかわりを中心に（鹿児島大学法文学部紀要『人文学科論集』第71号、2010年、155～173ページ）；ドイツ民族商業補助者連合（DHV）の教育活動——その全体像と「民族主義的」特色——第I部 序論と職業教育（鹿児島大学言語文化論集『VERBA』第35号、2011年、91～112ページ）；ドイツ民族商業補助者連合（DHV）の教育活動——その全体像と「民族主義的」特色——第II部 一般教育、青少年教育、および結論（鹿児島大学法文学部紀要『人文学科論集』第74号、2011年、133～164ページ）参照。
- 13 Die Deutsche Hausbücherei als Mittelpunkt der Familie. In: *Der hausücher Bote*. 1928 Nr. 11, S. 170ff, hier S. 171.
- 14 Ebd.
- 15 *Herdfeuer*. 1932 Nr. 6, das Titelblatt.
- 16 明星聖子：デジタルアーカイブのための新しい『文献学』——未来の『文学全集』、そしてその先にあるものを考えて——（情報処理学会研究報告.人文科学とコンピュータ研究会報告、2006-CH-70、25～32ページ）、27ページ。
- 17 Urban van Melis, a. a. O., S. 208.
- 18 Ein Brief aus Elberfeld. In: *Herdfeuer*. 1931 Nr. 12, S. 15.
- 19 Bücherfreunde sind Hausbücherei-Mitglieder. In: *Herdfeuer*. 1935 Nr. 4, S. 653.
- 20 Vgl. Einbandart der Wahlbände und der Sommergaben. In: *Herdfeuer*. 1932 Nr. 4, S. 189.
- 21 Ebd.
- 22 *Herdfeuer*. 1936 Nr. 1, S. 63.
- 23 Einbandart der Wahlbände und der Sommergaben, a. a. O.
- 24 Bücherbünde und Deutsche Hausbücherei. In: *Der hansische Bücherbote*. 1924 Nr. 6/7, S. 97ff., hier S. 97.
- 25 Die Deutsche Hausbücherei. In: *Herdfeuer*. 1934 Nr. 3, Nr. 4, Nr. 5, Seite des Inhaltsverzeichnisses.
- 26 拙論：ドイツ民族商業補助者連合（DHV）の教育活動——その全体像と「民族主義的」特色——第II部 一般教育、青少年教育、および結論、142～144ページ参照。
- 27 Von unserer Hausbücherei. In: *Herdfeuer*. 1933 Nr. 1, S. 78.
- 28 Die Deutsche Hausbücherei. In: *Herdfeuer*. 1935 Nr. 3. Diese Seite hat keine Seitenangabe und folgt auf die Seite 591.

- 29 Brief an ein neues Hausbücherei-Mitglied! In: *Herdfeuer*. 1940 Nr. 1, S. 31f., hier S. 32.  
 30 Bücherbünde und Deutsche Hausbücherei, a. a. O., S. 98.  
 31 Der 4. Reihenband wird besonders schön! In: *Herdfeuer*. 1933 Nr. 3, S. 237.  
 32 Es geht um den Einband! In: *Herdfeuer*. 1933 Nr. 6, S. 478.  
 33 Unser nächster Band. In: *Herdfeuer*. 1935 Nr. 3, S. 586f., hier S. 586.  
 34 Unser nächster Band. In: *Herdfeuer*. 1937 Nr. 6, S. 301f., hier 301.  
 35 Ebd., S. 302.  
 36 Zu unseren Einbänden, a. a. O.  
 37 Ebd.  
 38 Zum Halblederband „Die große Fahrt“. In: *Herdfeuer*. 1935 Nr. 2, S. 524.  
 39 Unser nächster Band. In: *Herdfeuer*. 1937 Nr. 1, S. 59ff.  
 40 Das deutsche Buch im Kriege. In: *Herdfeuer*. 1940 Nr. 2, S. 68.  
 41 Ab sofort nur noch Leinen-Bände! In: *Herdfeuer*. 1940 Nr. 2, S. 68.  
 42 Die Deutsche Hausbücherei. In: *Der hansische Bücherbote*. 1925 Nr. 1, Rückseite des Titelblattes.  
 43 Was will die Deutsche Hausbücherei? Rückblick und Ausblick. In: *Der hausbücher-Bote*. 1928 Nr. 3, S. 51.  
 44 Zu unseren Einbänden, a. a. O.

資料 1 : 「ドイツ家庭文庫」の雑誌において本の装丁に言及のある主な記事一覧

- 1) Deutsche Hausbücherei. In: *Der hansische Bücherbote*. 1923 Nr. 8, S. 36.
- 2) Deutsche Hausbücherei. In: *Der hansische Bücherbote*. 1924 Nr. 1/2, S. 8.
- 3) Was bietet die Deutsche Hausbücherei? In: *Der hansische Bücherbote*. 1924 Nr. 5. Diese Seite hat keine Seitenangabe und folgt auf die Seite 52.
- 4) Bücherbünde und Deutsche Hausbücherei. In: *Der hansische Bücherbote*. 1924 Nr. 6/7, S. 97ff.
- 5) Die Deutsche Hausbücherei. In: *Der hansische Bücherbote*. 1925 Nr. 1, Rückseite des Titelblattes.
- 6) Die Deutsche Hausbücherei als Mittelpunkt der Familie. In: *Der hausbücher Bote*. 1928 Nr. 11, S. 170ff.
- 7) Die Deutsche Hausbücherei. In: *Herdfeuer*. 1929 Nr. 4, S. 61.
- 8) Leinen oder Halbleder? In: *Herdfeuer*. 1929 Nr. 6, S. 80.
- 9) Wie komme ich billig zu guten Büchern? Wie ergänze ich meine Bücherei am besten? In: *Herdfeuer*. 1929 Nr. 10, S. 158.
- 10) So wächst Ihre Büchern. In: *Herdfeuer*. 1930 Nr. 1, S. 15.
- 11) Ein Buch wird zerlegt. In: *Herdfeuer*. 1931 Nr. 1, S. 14.
- 12) Die Leistungssteigerung der Deutschen Hausbücherei. In: *Herdfeuer*. 1931 Nr. 2, S. 32.
- 13) Bücher, die nichts kosten! Auch für Sie! In: *Herdfeuer*. 1931 Nr. 7, S. 14.
- 14) Wie die Deutsche Hausbücherei wurde. In: *Herdfeuer*. 1931 Nr. 11, S. 2f.
- 15) Ein Brief aus Elberfeld. In: *Herdfeuer*. 1931 Nr. 12, S. 15.
- 16) Wie unsere Hausbüchereibände entstehen. In: *Herdfeuer*. 1932 Nr. 41, S. 11f.
- 17) Einbandart der Wahlbände und der Sommergaben. In: *Herdfeuer*. 1932 Nr. 4, S. 189.
- 18) Deutsche Frauen werben für das Deutsche Buch. Briefe, die uns erreichten. In: *Herdfeuer*. 1933 Nr. 1, S. 76.
- 19) Von unserer Hausbücherei. In: *Herdfeuer*. 1933 Nr. 1, S. 78.
- 20) Senator v. Pressentin. 1. Gauführer im „Stahlhelm“, B. d. F., Gau Hamburg. In: *Herdfeuer*. 1933 Nr. 3, S. 236.
- 21) Der 4. Reihenband wird besonders schön! In: *Herdfeuer*. 1933 Nr. 3, S. 237.

- 22) Es geht um den Einband! In: *Herdfeuer*. 1933 Nr. 6, S. 478.
- 23) Die Deutsche Hausbücherei. In: *Herdfeuer*. 1934 Nr. 3, Nr. 4, Nr. 5, Seite des Inhaltsverzeichnisses.
- 24) Zum Halblederband „Die große Fahrt“. In: *Herdfeuer*. 1935 Nr. 2, S. 524.
- 25) Unser nächster Band. In: *Herdfeuer*. 1935 Nr. 3, S. 586f.
- 26) Die Deutsche Hausbücherei. In: *Herdfeuer*. 1935 Nr. 3. Diese Seite hat keine Seitenangabe und folgt auf die Seite 591.
- 27) Bücherfreunde sind Hausbücherei-Mitglieder. In: *Herdfeuer*. 1935 Nr. 4, S. 653.
- 28) Aus der Werkstatt der DHB. In: *Herdfeuer*. 1935 Nr. 5, S. 663ff.
- 29) Unser nächster Band. In: *Herdfeuer*. 1935 Nr. 5, S. 711f.
- 30) Die Bedingungen der DHB-Mitgliederschaft. In: *Herdfeuer*. 1935 Nr. 5. Diese Seite hat keine Seitenangabe und folgt auf die Seite 719.
- 31) Zu unseren Einbänden. In: *Herdfeuer*. 1936 Nr. 2, S. 126.
- 32) Zu nebenstehender Bildseite. In: *Herdfeuer*. 1936 Nr. 4, S. 252f.
- 33) Unser nächster Band. In: *Herdfeuer*. 1937 Nr. 1, S. 59ff.
- 34) An alle Mitglieder der Deutschen Hausbücherei. In: *Herdfeuer*. 1937 Nr. 3, S. 158.
- 35) Immer gut gefallen. In: *Herdfeuer*. 1937 Nr. 3, S. 159.
- 36) Unser nächster Band. In: *Herdfeuer*. 1937 Nr. 6, S. 301f.
- 37) Neues Jahr - neues Ziel. In: *Herdfeuer*. 1939 Nr. 1, S. 43f.
- 38) 1916 – 1933 – 1939 Ein Aufruf an alle Mitglieder der Deutschen Hausbücherei. In: *Herdfeuer*. 1939 Nr. 6, S. 225f.
- 39) Brief an ein neues Hausbücherei-Mitglied! In: *Herdfeuer*. 1940 Nr. 1, S. 31f.
- 40) Das deutsche Buch im Kriege. In: *Herdfeuer*. 1940 Nr. 2, S. 68.
- 41) Ab sofort nur noch Leinen-Bände! In: *Herdfeuer*. 1940 Nr. 2, S. 68.
- 42) Jugend und Buch. In: *Herdfeuer*. 1941 Nr. 4, S. 152f.